

学校行事

健康安全・体育的行事

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島市立庚午小学校	校長氏名	藤川 照彦	生徒指導主事氏名	大下 聡子
-----	-----------	------	-------	----------	-------

取組事例名	『プロジェクトX 挑戦者たち 成功させよう!!組体操』 —創造, 挑戦, 協力, 最高の思い出を自分たちで—
-------	---

取組のねらい『個人と集団の成長』

運動会での団体演技「組体操」への取組を、学年集団を育てる機会として活用した。1 学年 5 クラスを有する本校では、ともすると、各クラスで指導の違いや活動への温度差が生じ、児童への統一した指導が難しい点がある。学年集団を育てる中で、各クラスが切磋琢磨し、クラスに刺激を与える。それは、個人にとっても学びの場である学年の環境、クラスの環境がより改善されることになり、子どもたち個人としての学習を効果的に行うことにつながると考えた。

本校では、毎年、6 年生が団体演技で組体操を行っている。児童は、運動会の最後に最高学年としての自分たちの姿を保護者や他学年児童に見せることを誇りにしている。「組体操」が特質上、児童にとって「自分」の体と心を意識すること。自分自身が挑戦する体験が可能であること。また、友達が挑戦する姿から友達への理解や共に息を合わせる体験が可能であること。土台になる児童は、みんなの為に「貢献」や「忍耐」が必要とされることから、「組体操」の取組により、児童個人の成長と共に他者と協力し、活動できる態度の伸長を図ることをねらいとし、この取組を行った。

取組の具体的内容『児童によるプロジェクト化』

取組期間 平成 27 年 6 月 5 日から 9 月 26 日まで

- ① 6 月にプロジェクト化する意義を児童に理解させ、「心に残る運動会の演技を実行委員の行動力で成し遂げよう」と投げかけ、実行委員が中心となり、「計画」「練習」「評価」を繰り返し行った。
- ② 6 月中に「組体操」に向けての学年集会を持った。『決起集会』と名付け、「目的のために決意を固め、行動を起こす」ことで、学年全体の結束力を高めた。実行委員が運営し、集会の中で、各クラスの 4 月から 6 月までの成長を伝え合う場を設け、自分自身やクラスを振り返るとともに、他のクラスのがんばりを知り、学び合った。その後、それぞれのクラスで、何に取り組むかを明確にした。
- ③ 6 年生全員が、同じ気持ちで練習に取り組めるような「スローガン」を各クラスで考えた後、実行委員が学年で一つに決めた。児童の気持ちを高め、個人でも集団としても取組に対して意欲が継続するように廊下に掲示した。

取組の課題・創意工夫『指導の段階化』

指導方針、指導計画、指導する際の教師の態度やスタンスまで共通認識を図り、5 人の指導者がぶれない指導を行うための工夫を図った。特に、児童が課題に取り組む姿勢・態度に関して指導内容を段階的に決め、『人としての成長』『学年に求められる資質』の向上を図った。

【第 1 段階：意欲の向上】技の出来、不出来の評価ではなく、そこに至るまでの過程を評価した。廊下にコーナーを設け、児童の頑張りを写真に取り、掲示した。写真を通して行動を価値づけ、前向きに取り組めるように支援した。

【第 2 段階：自主性の向上】自主性を引きあげた。自主的な集合・整列。休憩時間の自主練習 朝練習も評価した。個人・パート・部分練習等、自主的に活動できるよう支援した。自分たちで解決する課題を感じ取らせ、行動に移させた。それぞれの努力や工夫を教師が紹介し価値づけた。

【第 3 段階：粘り強さ・地道さの向上】慣れてきて、児童の気持ちが緩む時期に入る為、手抜き、ごまかし、不満で逃げる行為に対して、教員が立ちふさがり、子どもたちの心を揺さぶった。問題点や課題

を提示し、学年団として「ゆるぎない態度」で指導した。児童には、自分自身と向き合い、自分の言葉で自分の思いを言葉に出させ、共感させた。学年集会を開き、責任をもって子どもたちに現状を修正させた。実行委員を通して取り組み本来の目的やどんな気持ちで本番を迎えるか考えさせた。

【第4段階：努力したことを成果として求める】期日に間に合わせることも必要である。計画的に練習し、不足はクラスでの補充指導を行った。

【第5段階：仕上げ】運動会前日に5年生に見せ、力を出し切って演技をさせた。運動会当日、保護者や全校児童の前で「個人の成長」と6学年としての「集団の成長」を表現した。演技直前に、応援団長が中心となり、円陣を組んだ。子どもたちの掛け声が響き、最も気持ちが高まった状態で本番に臨めた。

課題としては、時間がかかることである。児童自身にとって、組体操は心と体が一体となった活動である。第5段階に至るまでには、話し合い、試行錯誤、挫折感なども経験をさせるため、子どもたちに十分な時間の確保が必要である。その分、児童自身で到達した成果と児童が実感できる。

取組の成果（効果）『人としての成長 仲間への信頼』

「組体操」の演題を「花鳥風月」とした。児童自身の成長を表現したものである。初めは幼かった花のように愛らしい子どもが鳥のように羽ばたき始め、風のごとく荒れることもあった。そして、月のように高見から、静かに落ち着いて様々なもの見て行動できるような成長を遂げていくという構成にした。児童は自分自身を表現することで、心をも表現しようとするところまで成長した。

プロジェクト化して「組体操」に児童を参画させたことで、児童が自ら課題に取り組み、目標を達成する体験をすることができた。個人としての、自主性や粘り強さの向上と共に、仲間への理解、連携・連帯意識を高めることができた。助けたり、助けられたりする体験により、友情の深まりが見られた。

【児童の作文より】「…私の中で、『この時』というのは、友達の大切さに気付けた時でした。…『自分が落とした』ということに責任を感じ、落ち込んでいた私ですが、周りの友達が助けてくれて、部屋で一人の時にも常に支え合えるような気がしました。この時、やっと、今から変わらなきゃいけないだと実感しました。それから練習を重ね、変わった私を見てもらいたくて、本気になりました。私が本気になれたのは、友達がいたからです。」



今後の展開『プロジェクトの積み重ね』

10月の修学旅行でもプロジェクト化を図り、実行委員が6学年として旅行先でどう行動するか話し合い、クラスに提案し、実行した。旅行先でも、実行委員を中心に、主体的に行動した。3月の卒業式でもプロジェクト化を図り、実行委員が卒業式でどのような姿を保護者やお世話になった地域の方や先生に見せたいのかを話し合い、学年とクラスで取り組む。

他校へのアドバイス『プロジェクトの継続化』

毎年必ず行う行事を通して児童に「人としての成長」と「集団の一員としての成長」を促すことが可能である。プロジェクト化は児童が主体的に取り組み、意欲を継続させることが有効である。行事ごとに繰り返し行うことで、次の行事に向け、意欲を継続することができる。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	北広島町立壬生小学校	校長氏名	松島 尚志	生徒指導主事氏名	鈴木 久恵
-----	------------	------	-------	----------	-------

取組事例名 『自己指導力を高める取組～運動会、マラソン大会を通して～』

取組のねらい『自分を内省する力』

一人一人の児童が自らの課題を持ち、自己を振り返りながら学校行事（運動会やマラソン大会）へ取り組む中で、自分を内省する力を伸ばすとともに、自己指導力を高めていくことができるようにする。

取組の具体的内容『失敗を成功にする』『自分の成長をたしかめる』

【運動会】

○目標を設定し、それに対する振り返りをするためのワークシートを生徒指導部で作成し、全校統一して取組む。

(ワークシート活用の手順)

①運動会テーマ「輝け！壬生小魂～正々堂々 真向勝負～」を大きな目標として、自分はどんな運動会にしたいかを考える。

【自分の目標の設定】

②そのために自分は何を頑張るかを考える。

【具体的な行動目標の設定】

③本番までの間で、4回程度（週2回）振り返りをさせる。

【失敗を成功に】 【自分の成長】

具体的な行動目標ができたか、できなかったか、それはなぜか。その後、具体的な行動目標を変更したり、付け加えたりすることもする。

低学年については、実態に応じて「◎・○・△」などの記号を使うなどして評価させる。

④運動会が終わった後、これまでの振り返りシートを見ながら、運動会の中での自分の成長、がんばったことを作文にまとめる。

【自分の成長】



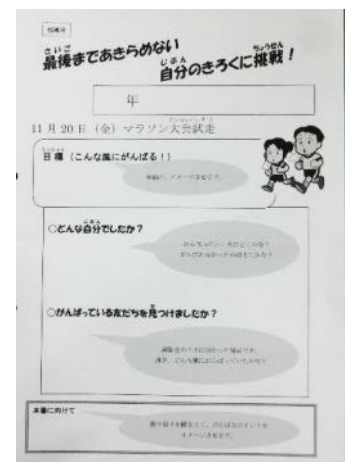
○ワークシートや行動観察を元に、児童の活動を評価し、個々の児童へ或いは学級全体へ指導・助言をする。

○運動会后、行事アンケートを実施し、評価を行う。(学校自己評価の評価項目とのリンク)

【マラソン大会】

○運動会の反省を受け、「友達との関わり」「友達のよさを見つける」ことについて意識して取り組めるよう、全職員で意識統一するとともに、児童にも目標を考える際の視点として示した。

○運動会と同様に取組途中（試走）で自己を見つめることができるようなワークシートを用意した。



マラソン大会ワークシート(指導者用)

取組の課題・創意工夫『繰り返し』

○ワークシートの工夫

- ・一枚のシートで取組の経過が見えるようにした。
- ・児童も担任も負担にならない程度のものになるように留意した。
実施後、週に2回で4回程度としていたが、記入のスペース等も考えて、3回くらいの振り返りが良いのではないかという反省もあった。



○不登校気味の児童に対する支援

- ・ワークシートをつかいながら、学校行事にどのくらい参加し、がんばれたかを毎日自分自身で確認をする活動を行った。
- ・1時間練習に参加するごとにシールを貼った。(運動会)

取組の成果（効果）『評価・支援につながる』

○児童実態の把握と評価

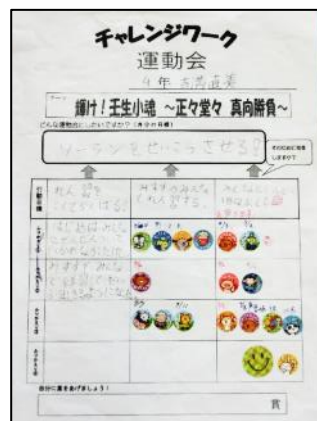
- ・ワークシートに書き出すことで、それぞれの児童がどこに課題を感じているのか、何をがんばろうとしているのかをつかむことができ、児童理解につながった。
- ・振り返りをする際、抽象的な言葉でしか表現していない児童に対して、「どんな場面でできたのか。(できなかったのか。)」 「目標に近づくためには、いつ、どのようなことをするのか。」など具体的な行動をイメージさせるような助言ができた。

○自分を内省する、具体的な行動目標をイメージ

「目標はだいたいできた。でも、マイナス発言をしてしまった時があった。」と自分の姿を思い返してみたり、「係の仕事がんばる。」とだけ目標としていた児童が「応援のときに低学年へ声をかけるようにする。」と次への具体的な行動目標をイメージすることができたりしていた。

○不登校気味の児童への支援

- ・できたことをシールを使って評価をしていったことで、自分の頑張りが視覚化され、また「シールを貼れた」という充実感につながった。結果、出場種目数も当初の目標よりも多くなり、「できた」という自信を持つことができた。(運動会)



今後の展開『自己表現、自己実現』

- ・ただ行事を成功させるというのではなく、それまでの過程が大切であり、失敗もしながらも次にどうすればいいのか考え、挑戦していこうとすることに価値があることを、児童そして指導者が意識しながら取組を進めていきたい。
- ・自分の思いを言葉で表すことに課題がある。自己を振り返り、自分の中の思いを出していく機会を多くしていくことで、漠然とではなく、具体的に自分の思いを表現できる力をつけていきたい。
- ・学校行事だけでなく、係活動・委員会活動などにおいても活用していくことを検討する。

他校へのアドバイス『繰り返し』

- ・児童も初めのうちは、なかなか書けないと思います。これも繰り返し続けることで、どのように振り返ればいいのか見えてくると思われます。ポイントとしては、5W1H (いつ、どこで、なにを、どのように、どうしてできなかった、どうしてできた) を意識して考えさせると良いのではないかと考えています。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	北広島町立八重小学校	校長氏名	神川 義紀	生徒指導主事氏名	吉川 孝志
-----	------------	------	-------	----------	-------

取組事例名 『校内駅伝大会』

取組のねらい『キーワード 異学年交流』

本校では、毎年、12月初め、全児童による校内マラソン大会が行われる。学校行事ではあるが、児童会（6年生）を中心に事前・事後の取組を行っている。下学年にとっては「ぼくたち、わたしたちも大きくなったら、あんな風に走りたい（がんばりたい）」というあこがれの対象を具体化させ、なりたい自分をイメージさせるのに役立ち、上学年にとっては、「自分たちがチームみんなをまとめて引っ張っていくんだ。」という責任を自覚させ、取り組ませることで、自己有用感や自己肯定感の向上につなげていく。

取組の具体的内容『キーワード 学校のリーダーとして』

縦割り活動班の「やえっこ班」を活用し、12チームを作る。全15区間を、高学年区間0.9km、中学年区間0.7km、低学年区間0.6kmに分ける。校庭のトラックを使い、そこから校外に飛び出していく形でコースが設定してあり、区間によって折り返し地点などが遠くなったりしている。校庭のトラックでは、各チームの児童が自分のチームの応援をしており、学校の外では、保護者や地域の人たちがランナーに声援を送っている。各折り返し地点やコースの要所には職員を配置し、選手の誘導や安全の確保、声かけなどを行う。「やえっこ班」は毎日の掃除にも活用しており、異学年であっても、顔と名前が一致する利点がある。チームを12に分けることで、1チーム平均2.5人6年生（30名）が入ることになる。6年生のほとんどの子がキャプテン、副キャプテンの責任を負うことになる。残り6名は、特別支援学級（情緒）2名、不登校傾向児童2名、2学期からの転入生2名であり、応援などのチームサポートの役割を担っていた。欠員が出た場合は、原則同じ区間を走る学年の児童が2回走るようになっている。

1区（中学年）⇒2区（高学年）⇒3区（中学年）⇒4区（低学年）⇒5区（高学年）⇒

6区（中学年）⇒7区（低学年）⇒8区（中学年）⇒9区（低学年）⇒10区（高学年）⇒

11区（中学年）⇒12区（高学年）

取組の課題・創意工夫『キーワード 本音の出し合い、安心する』

駅伝大会の本番半月前くらいに、チーム結成式を行う。主には、6年生が考えてきたチームのキャッチフレーズや目標をみんなで共有することを目的とする。もう一つ、駅伝大会に向けて自分が不安に思っていること、心配なことをその場で出し合う。その不安や心配に対し、6年生を中心とする高学年が自分の経験を語りながら、解決方法や気持ちの持ち方をアドバイスする。例えば「長い距離を走るのが苦手な遅いから、あまり駅伝大会に出たくない。」という1年生の悩みに対しては、「私も1年生のとき遅くてチームのみんなに迷惑かけたように思ったけれど、走り終わったらチームのみんなが『よくやったね』『頑張ってたね』と言ってくれてすごうれしかった。順位じゃなくて最後まで一生懸命走ることが大切なんよ。それができればいいんじゃないか。一緒に頑張ろう。」と高学年が返してくれる。自分がチームのみんなにしてもらってうれしかったことをもとに高学年は声かけをしてくれるので、説得力がある。また、個々の不安や悩みを6年生が把握することで、チームごとの練習段階からそれに配慮した声かけが可能になってくる。チーム結成式の後は、大休憩や昼休憩を使い、たすき渡しの練習や持久走などの練習を本番まで各チームで行った。

取組の成果（効果）『キーワード 絆』

駅伝当日、欠席者0名、早退者1名、遅刻者1名（通院）、骨折などによる見学者3名。6年不登校傾向児童2名完走、運動が苦手な児童も多数完走。校庭ではチームの6年生を中心に大きな声で声援を送る。コースに立っている教職員はもちろん、沿道の保護者や地域の方々からも大きな声援をもらい、子どもたちの頑張りは最高潮に。大きな拍手とともにチームメイトに迎えられ、みんないい笑顔に。その中でも、高学年特に6年生の頑張りは素晴らしい。病気やケガで走れなかったチームメイトのために、たとえ走るのが苦手であっても2区間走る姿は、下学年の児童の目に焼きつき「自分たちも大きくなったら、あんな風に走るんだ！」という絶好のモデルケースになる。また、6年生を中心とした高学年は自分たちの頑張りに対し、下学年や教職員、地域の方からもらった声援が自己有用感や自己肯定感を高め、新たな活動への自信と意欲づけになる。走り終わった後は、チーム毎に記念撮影をし、駅伝大会を通しての反省会を行った。

今後の展開『キーワード 継承』

駅伝大会後に撮影した写真は、6年生が卒業するとき、各班のメンバーが6年生に寄せ書きをする色紙の中心に貼る。日々の掃除などでの縦割り班活動にいつそうまとまりが見られるようになる。今後は、6年生というモデルを胸に、各学年がよりよい自分、集団をめざして活動をしていく。特に、3学期の「6年生を送る会」に向けて、感謝の気持ちを込めた出し物を考え、本番では各学年が今後の学校生活における決意表明をしていく。

他校へのアドバイス『キーワード 異学年交流のパワー』

異学年交流が学校の核になっていくと、素晴らしい伝統が築き上げられていく。先輩の頑張りを見て、後輩がその姿を見て頑張る。さらにその後輩が先輩の姿を見て頑張ることを繰り返していくうちに、先輩の壁も少しずつ高くなり、さらによいものをめざして取り組んでいくようになる。このプラスの連鎖が異学年交流のパワーの源であり、物事を前向きにとらえ、一生懸命に取り組む児童の育成に役立つものだとしている。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	尾道市立栗原北小学校	校長氏名	本藤 展康	生徒指導主事氏名	利田 政美
-----	------------	------	-------	----------	-------

取組事例名 『栗原北小学校 運動会 ～変える、変わる、われらの学校！～』

取組のねらい『キーワード 自律性の醸成』

・昨年度、栗原北小学校では暴力行為等が多く生じた。そんな状況を見てきた6年生は、「このままではいけない。栗原北小学校を自分たちで良い学校へ変えていきたい。」という気持ちを持っている。運動会の取組を通して、愛校心や正義感といった前向きな気持ちを高めていくことで児童の自律性を醸成し、児童が生き生きと生活できる落ち着いた学校づくりの実現を図っていく。

取組の具体的内容『キーワード 一体感と達成感の高揚』

<目標・ふり返し>

- ・6年生全員で、「こんな運動会をつくりたい」というめざす運動会像について話し合い、明確にする。
- ・児童会を中心に運動会のテーマを決め、児童代表委員会でその思いを全校に伝える。
- ・全児童が、運動会に向けて自分が頑張る目標を明確にし、掲示する。
- ・運動会後には、自分の目標に対してのふり返しを行い、掲示する。
- ・他学年への評価を行い、掲示する。

児童の感想より

○組体操の最後は全員ピラミッド。私はとてもドキドキした。絶対に成功すると信じた。全員を信じた。前を向くといつも見えるはずの影がなかった。もしかして立っていないのか・・・その時、とても温かい拍手に包まれた。立っていると確信した。一段ずつ下りてハイタッチ。自然に涙が出てきた。仲良しの子、そうではない子、そんなことは全く関係なかった。とても達成感があり、この58人だからこそできたのだと思い、感動した。自分達が感動するから見ている人にも感動を与えることができる。点数で表すわけでもない。表彰されるわけでもない。でも、私自身とても感動した。(6年児童)

○5年生のみんなへ 運動会ではみんなと協力して準備をしてきたけど、5年生のみんなはとてもよくがんばってくれていたよ。みんななら安心して6年生を任せられるよ。僕達が卒業したらみんなが栗原北小学校をうまく引っ張って行ってね。(6年児童)

<応援合戦>

- ・応援合戦を演技に位置づける。
- ・6年生の応援団を中心に、児童が応援歌や振り付けを考える。
- ・6年生の応援団が中心となって、練習計画を立て、練習をする。
- ・応援合戦の中で、お互いにエール交換を行う。
- ・運動会当日、地域の参観者に応援合戦の得点を入れてもらい、勝敗を決める。

児童の感想より

○私がこの応援団で得たものは支え合い、そして感謝だ。はじめの練習では、なかなか大きな声が出なくてただただしているのが目立っていた。それが、練習を重ねるうちに、大きな声が出るようになり、みんなの動きがそろそろようになり、だんだんと変わってきた。「いっしょにがんばろう。」という言葉が増えた。変わっているということはみんなの支えがあったから。それは友達、先生方、保護者の方、いろんな方に支えてもらった。たくさんの感謝だ。この運動会を通して私が成長したことは、自信が持てるようになったことだ。この自信を活かしてこれからもがんばっていききたい。

(6年児童)



取組の課題・創意工夫『キーワード 評価の見える化』

<創意工夫>

- ・児童みんなが全力を出し、力を合わせる運動会のイメージを児童自身が考え話し合った。
- ・運動会の練習や運動会当日の具体的な目標や評価基準を児童が話し合い設定した。
- ・他学年の児童や地域の方を含めての多角的な視点からの評価を行い、評価内容を掲示する等、評価の見える化を図った。

<課題>

- ・児童に考えさせたり練習をさせたりする時間が十分に取れなかった。
- ・児童の話し合い活動における進行や具体的な意見、討論に対する教職員の指導、サポートが十分ではなかった。

取組の成果（効果）『キーワード 感謝の心と自尊感情の醸成』

- ・運動会までの練習における6年生の一生懸命な姿や当日のリーダーの真剣な姿から、他の学年の児童にも栗原北小学校を良い学校にしていこうとする愛校心が高まってきた。
- ・児童自身が行事をつかっていこうとする意識が高まり、6年生を中心として主体的な動き、自律的な姿が見られるようになった。
- ・保護者や地域の方が温かい目で見てくださいという実感を児童が抱くことができ、感謝の心や自尊感情を育むことができた。
- ・運動会での取組を学習発表会に活かすことができ、学習発表会での6年生のメッセージを全児童で受け止め、これからの自分たちの行動について考えることができた。

今後の展開『キーワード 取組の継承』

- ・今までの取組で育まれた自尊感情や一体感・愛校心を下学年に継承するために、今まで自分達がいろいろな活動を行ってきた思いや下学年への願いを伝える場を設定する。
- ・目標設定や計画作成、活動の実施、ふり返りや評価といった過程を大切にすることで、児童の主体的な活動を推進する。

他校へのアドバイス『キーワード 児童が主体となる活動の推進』

- ・児童が持っている愛校心や正義感といった前向きな気持ちがより高まるよう、学校行事等において児童が主体的に活動できる場面を設定していく。そのような取組に加え、他の学年の児童や保護者地域の方からの温かい励ましや肯定的な評価を実感させることで、児童の自律性が醸成されるものとする。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島市立吉島中学校	校長氏名	高畑 伸穂	生徒指導主事氏名	後藤 貢
-----	-----------	------	-------	----------	------

取組事例名 『体育祭 縦割り活動』

取組のねらい 『キーワード 共感的人間関係づくり』

体育祭に縦割り活動を取り入れ、吉中ソーラン、色別の集会・練習・応援など生徒主体の活動を沢山行うことにより、学年を超えた生徒相互の人間関係を育む。

取組の具体的内容 『キーワード 上級生から下級生に継承』

3年生のリードのもと、縦割り集団で、当日までの取り組みや当日の応援を行うことで、2年生に次年度は自分たちでやるという意識をもたせる。

今年度から始めた「吉中ソーラン」を、来年度は、上級生から下級生へと展開させ、全校生徒による吉中ソーランをつくりあげたいと考えている。



【体育祭色別集会：縦割り活動開始】



【色別練習：3年生からの指示】



【応援の様子：旗を振るのは3年生】



【色別リレー】



【色別の法被を着て踊る吉中ソーラン】



【色別の得点板】



【閉会式での成績発表】



【色別集会：体育祭の縦割り活動終了】

取組の課題・創意工夫『キーワード 事前の取り組みをしかける』

生徒達がより深く共感できるよう、事前に教師がリーダーとなる学年を中心に指導を十分に行い、生徒と教師が共に取り組む事が大切である。

また、この縦割りの取り組みを体育祭だけに終わらず、文化祭の合唱発表やその他の活動にもつなげ、上級生がリーダーとなる場면을仕組む事で継続した取り組みになるようにする。



【文化祭（合唱コンクール）の縦割り練習会の様子】

取組の成果（効果）『キーワード 所属意識の高まり』

今までの学級単位の競技・競争から、異学年の集団になったことでより仲間意識が高まりそれによって、どの生徒もより一層応援や競技を頑張るようになった。

特に3年生については、色別集会の時からリーダーシップを発揮し、当日も率先して競技を盛り上げていた。また、そんな上級生の姿を見て1・2年生は来年は「自分たちがやるぞ!」と思ったようである。



【体育祭当日の朝 競技開始前の様子】

今後の展開『キーワード 本校の伝統に』

今後は生徒主体の取り組みが体育祭のみならず、様々な活動で行えるようになることで、仲間を大切に、思いやる生徒集団の育成を図りたい。そうすることが共感的な人間関係を育む事への手立てになると考えている。

他校へのアドバイス『キーワード まずは、やってみる』

今まで行って来たことに、手を加えたり、何かを変えたりするにはエネルギーが必要となるが、現状を改善していくためには、みんなの共通認識のもと、まずは一歩を踏み出すことが重要である。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島市立福木中学校	校長氏名	笹田 清浩	生徒指導主事氏名	平田 琢巳
-----	-----------	------	-------	----------	-------

取組事例名 『縦割り活動を生かした体育祭』

取組のねらい『キーワード 生徒同士の共感的な人間関係』

- ・ 縦割り活動（異学年交流）
- ・ 上級生が下級生の手本になり、下級生のことを思いやり、下級生が上級生を尊敬しながらお互いの励みとする。

取組の具体的内容『キーワード 縦割りでの協力』

- ・ 体育祭実行委員会、各係会で運営する。
- ・ 体育祭の予行準備や前日準備を部活動に割りあてる。
- ・ 学年を 3 色の色別に分けて競技し、縦割りの意識を高め合計点で総合順位を決定する。



監察係生徒の様子



入場行進



全体集合



色別の生徒席

取組の課題・創意工夫『キーワード もっと縦割り活動を』

- ・ もっと縦割り活動を工夫して上級生の活動の場を設ける。
- ・ 縦割り合同練習の時間の確保、作戦の交流、練習を仕組む。
- ・ 団長の活躍の場を設けて生徒自ら体育祭に打ち込める体験をさせる。



黄組（1組）



青組（2組）



赤組（3組）

取組の成果（効果）『キーワード 上級生のリーダーシップ』

- ・ 「去年より今年の体育祭」を特に 3 年生は意識していた。昨年度はどうかと不安な一面も見られたが、今年度当初から「私たちが、俺たちがリードする」という意気込みが感じられた。
- ・ 体育祭では、生徒会により開会式と閉会式を運営し、団長を先頭に縦割り団での入場行進を取り入れた。



縦割り入場行進



開会式（選手宣誓）



閉会式（表彰）

今後の展開『キーワード すごい福木中にしちゃおう』

- ・ 「今年の3年生に続け、追い越せ、新たな福木中学校をつくろう。すごい学校にしちゃおう。」をスローガンに1・2年生での取組の気運を高める。
- ・ 生徒会の活性化とリーダーの育成を図る。

他校へのアドバイス『キーワード 達成感が味わえる体験を大切にしたい学校づくり』

- ・ 学級での係活動や生徒会を中心とした学校行事を通して、生徒同士のつながりを大切にさせ、教職員が適切な声かけをして、生徒たち自身にやり切らせることで達成感が味わえる体験をさせていきたい。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島市立庚午中学校	校長氏名	渡邊 俊二	生徒指導主事氏名	藤井 麻里
取組事例名 『体育祭』					
取組のねらい『キーワード ピア・サポート』					
「ピア・サポート」とは、異年齢が関わり相互支援の体制をつくるものである。上級生がリーダーとして下級生を導き、繋がり、互いに力を合わせる取組を具体的に作り出す。					
取組の具体的内容『キーワード 体育祭—きずな』					
<p>① 体育祭の競技種目は学年種目と縦割りの団体種目を実施している。縦割種目は、玉入れ、ボール運び、色別リレー、山超え谷超え、がある。縦割種目の練習は時間を一斉に取り、上級生が下級生に声をかけ、合同で練習し取り組んでいる。また、放課後練習も色別（縦割り学級）で実施し、体育祭実行委員が学年を超え、協力体制をつくり進めている。</p> <p>② 全員ジャンプ（長縄）、学級全員リレーは学級全員で作戦を立てクラス全員で練習をする。</p> <p>③ 体育祭実行委員会、各係会も全学年の係が運営する。</p> <p>④ 体育祭の応援を色別に行い、同級生同士の連携、縦割りの連携をする。</p>					
取組の課題・創意工夫『キーワード 年間通して』					
<p>体育祭だけでなく、年間を通し行事に「ピアサポート」を盛り込む。（入学式、合唱祭、体育祭、卒業式など）</p> <p>① 入学式→入学を祝う装飾をする。入学式後、新入生の教室に 3 年生有志が行き学級開きを行う。新入生のエンカウンターと学校紹介をする。和やかな雰囲気を入学生や保護者が感じ、お互いを知るきっかけをつくる。</p> <p>② 合唱祭→学年交流だけでなく、縦割り交流をし、高め合う。（メッセージ交換）</p> <p>③ 体育祭→縦割りで取り組む。</p> <p>④ 卒業式→卒業式装飾を縦割りクラスが受け持ち行う。「さくらメッセージ」を贈る。巣立つ思いを後輩に残し、伝統の継承を託す。</p> <p>⑤ 小中連携→オープンスクール、小学校に行つての挨拶運動もピアサポート交流。</p>					
取組の成果（効果）『キーワード 連帯』					
<p>① 上級性の存在が頼もしい存在、また見本となる存在となり、下級生の目標となっている。</p> <p>② 体育祭を中心に、年度初めから、生徒の交流を組織的に行っている。特に体育祭での縦割り練習や応援は、上級性の意識を高め、学校の連帯を生む効果がある。また、行事を通して、集団生活のなかでの決まりを守り他者を尊重する態度や心を育てる効果がある。</p>					
今後の展開『キーワード 日常活動』					
行事だけでなく、継続した日常の取組につなげていく。					
他校へのアドバイス『キーワード 始まり』					
入学式のピアサポートが新入生だけでなく保護者の安心感につながっている。新入生歓迎の取組をする中で、先輩になった自覚と緊張感が生まれ、自己肯定感が高まり、新年度の良いスタートがきれている。					



平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島市立観音中学校	校長氏名	中山 昭彦	生徒指導主事氏名	原田 利博
-----	-----------	------	-------	----------	-------

取組事例名 『体育大会への取組』

取組のねらい『キーワード つなぐ』

- ・ 学級・学年・縦割り学級群をつなぐ。
- ・ 係分担や練習などを通して団結することにより、学級集団の向上を図る。
- ・ 委員会を中心に、生徒の力で運営できる力を育てる。



取組の具体的内容『キーワード つながりをつくる』

- ・ 朝練習・放課後練習を行う。

リーダーが練習への全員参加を呼びかける。クラス内で上手なやり方を工夫したり、声を掛け合うことで、クラス内の団結力を高める。また、縦割り学級群の中でアドバイスを与えたりもらったりしながら、縦割りのつながりを作る。



- ・ 縦割り交流会の実施（合同ムカデ練習、合同ダンス練習）

上級生が下級生に指導する。上級生には自覚が、下級生にはリーダーを認める雰囲気を作る。

- ・ ありがとうカード作成

同じ学級群のクラスに“ありがとうカード”を送る。運動が苦手な生徒もありがとうカードをもらうことで、“頑張ってたかった”“文化祭でも頑張ろう”という気持ちが持てるようにする。



取組の課題・創意工夫『キーワード みんなを巻き込む』

- ・ 3年生からメンバー決めアドバイス、応援団員募集の呼びかけ

3年生が1・2年生の教室に出向き、競技の説明や、メンバーを決める際に工夫すべき点などを説明する。また、応援団員募集の呼びかけも行う。

- ・ マナー点検の実施

着ベル点検、服装点検を行う。違反があった場合は体育大会本番の得点から減点する。リーダーや委員会生徒を中心に学級内で声かけを行う。



- ・ 保護者席は生徒席と同じにする。

保護者は生徒と同じテントに入ってもらい、生徒の実態を知ってもらい、生徒に声かけをしてもらう。



取組の成果（効果）『キーワード 憧れを持たせる』

◎文化祭に向けて

- ・合唱祭への取組がスムーズに行く

次は文化祭に向けて頑張ろう、文化祭ではパートリーダーを中心にクラスで頑張っていこう、文化祭でも学級群みんなで頑張ろうという雰囲気が自然に出来上がる。

- ・縦割り合唱練習の実施

パートリーダーを中心にして後輩からは感想、先輩からは感想とアドバイスをもらい、合唱練習の取組に生かす。

◎学校生活において

- ・リーダーがみんなに認められる雰囲気ができる

みんなの前に立ち、みんなを引っ張って行ってくれるリーダーを認め、憧れ、リーダーになりたいという雰囲気ができてくる。

今 後 の 展 開『キーワード バトンをつなぐ』

- ・3年生にエールを送る

入試前に、1・2年生の応援団員が縦割り交流でお世話になった3年生のクラスに行き、エールを送る。3年生からは、1・2年生にありがとうカードを送るとともに、代表者がメッセージを伝えに行く。

- ・2年生が中心となって卒業式の歌練習を行う

2年生が中心になって、在校生の合唱練習、全体合唱練習を指揮していく。

- ・授業への展開

みんなですることが楽しい、仲間を見捨てないという気持ちが持てるようになる。3年生からの声かけを自分たちの「関わりとつながり」に。

他校へのアドバイス『キーワード みんなをつなぐ』

- ・生徒同士、保護者と生徒が声を掛け合わざるを得ない状況を作る。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島市立亀山中学校	校長氏名	松田 裕二	生徒指導主事氏名	今橋 正智
取組事例名		『体育祭』			
取組のねらい 『キーワード 集団や社会の一員としての自覚』					
体育祭を通じて、規範意識や倫理観、他人への思いやりの心など、集団や社会の一員としての自覚や豊かな人間性をはぐくむ					
取組の具体的内容 『キーワード 責任感』					
<ul style="list-style-type: none"> ・リーダーからの服装指導 ・生徒が主体となった当日の運営 ・生徒会執行部を中心としたオープニングダンスの取組 ・体育祭実行委員を中心としたブロック練習 ・体育祭応援団を中心としたブロック応援練習 ・集合などの素早さを求めたり、練習時間を厳守するなど、時間を大切にする観点 ・全員で責任を持って行う当日の後片づけ 					
取組の課題・創意工夫 『キーワード 全員』					
<ul style="list-style-type: none"> ・集団行動の苦手な生徒や服装違反の生徒数名が当日参加することができなかった。 ・準備から運営において、一部の教員に負担がかかっている。 					
取組の成果（効果） 『キーワード 成長』					
<ul style="list-style-type: none"> ・全力で取り組むこと、妥協しないで取り組むこと、協力して取り組むこと、一つのことをみんなで取り組むことの大切さやすばらしさを生徒が体験することができた。 ・自分の役割に責任を持ってやり切ることの大切さ、大変さを学ぶことができた。 ・感想文を書かせ、学級通信、学年通信、学校だよりでフィードバックし、自己肯定感を高めた。 					
今後の展開 『キーワード 学んだことをいかす』					
<ul style="list-style-type: none"> ・その後、文化祭、教育研修旅行、PTCと行事が続いていき、行事だけでなく日常の中で、いかに行事で学んだことをいかしていくかということを、全校集会や学年集会などで生徒に伝えていく。 ・行事全員参加を目標に取り組んでいく。 					
他校へのアドバイス 『キーワード 自主性』					
生徒が先頭に立って頑張れるよう、そこまでの手助けを教員がしっかりとする。当日は生徒が主体となって動き、やり切ったという達成感を得られるようにする。					

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島市立三入中学校	校長氏名	竹下 雅祥	生徒指導主事氏名	高岡 昇生
取組事例名 『体育祭における縦割り活動』					
取組のねらい 『キーワード 上級生から下級生へ』					
<p>体育祭の縦割り活動を通して、上級生・下級生が目的に向かって団結する態度を育てる。 仲間づくりを進め、学年を越えた協力体制を養う。</p>					
取組の具体的内容 『キーワード 縦割りブロック活動』					
<p>3年生による競技説明や応援指導、ブロック練習についての打ち合わせ等を3ブロックに分かれて行う。 ブロック競技前の作戦会議やブロックによる応援方法を決定するなど、集団での協力体制の育成を図る。 体育祭では、3年生の各競技チーフからの作戦指示（競技の戦略）やブロック応援の指示を行う。 ブロック代表生徒の呼びかけにより、体育祭終了後に各ブロック会・ブロック練習時の反省やブロック応援の反省、今後に向けて後輩たちへの助言を行う。</p>					
取組の課題・創意工夫 『キーワード 不登校対策・生徒主体』					
<p>関わりを多く持つ必要があると考える生徒のうち、活動に参加できている生徒については、一定の成果があるが、不登校傾向生徒への声かけが難しく、生徒から呼びかけても参加できていない。 教職員はほとんど携わらない中、生徒主体でブロック活動を行う。 3年生の競技チーフや学級代表者が先頭に立ってブロック生徒に指示し、各学級代表がブロック活動における成果と課題、今後に向けてについて発表することにより、生徒の主体性が育まれる。</p>					
取組の成果（効果） 『キーワード 規範意識の育成』					
<p>縦割り活動を行うことにより、問題を抱えている生徒に、どの生徒からも声かけすることができ、集団としての協力体制が育つとともに、日々の学校生活においても生徒からの声かけができやすくなった。（規範意識の育成ができつつある。）</p>					
今後の展開 『キーワード 生徒会を交えた対策』					
<p>縦割り活動における不登校傾向生徒への対応について、生徒会を含め検討していきたい。 また、学校内で研修し今後の取組について検討したい。</p>					
他校へのアドバイス 『キーワード 縦割り活動』					
<p>本校では、体育祭以外にも、文化祭や入学式、卒業式の各種行事で、縦割り活動を行うとともに、上級生からの下級生への学習支援を行っています。 縦割り活動を行うことにより生徒の協力体制が育ち、規範意識も高まります。</p>					

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島市立五日市南中学校	校長氏名	藤川 要造	生徒指導主事氏名	波止元 貴士
-----	-------------	------	-------	----------	--------

取組事例名 『 体育祭 』

取組のねらい『キーワード つながり』

5月にある体育祭の取組を通して、学級・学年の横のつながりを深めるとともに、縦割りでの取組を通して学年を越えた生徒同士のつながりを育む。

取組の具体的内容『キーワード 縦割り交流』

今年度から縦割りチームごとに入場行進をすることにし、その練習を3年生中心に行い、学年を越えた教え合いやアドバイスができる時間を確保した。また、縦割りチームごとの得点・順位も出すようにし、入場行進も得点に加えた。学年全体種目を固定化することで、種目のポイントやアドバイスを先輩から後輩に教える姿が見られた。本番では縦割りチームで行う入場行進はもちろん、他学年の競技も一生懸命応援しており、縦割りでの交流が深まった。



取組の課題・創意工夫『キーワード 3年生をリーダーとして』

体育祭実行委員会を組織し、縦割りの取組の中心として実行委員が動いた。なかでも3年生の実行委員は、チームリーダーとして入場行進の練習を計画し、どのようにすれば行進がそろおうのかを考え、チームに提案しながら実践した。どのチームも完成度の高い行進ができ、3年生のリーダーも充実感を感じていた。

課題としては次年度につなげるためにも2年生実行委員の役割を明確にし、3年生とともに練習に取り組ませることができればよかった。



取組の成果（効果）『キーワード 所属感・連帯感』

年度当初から体育祭に向けて取り組むため、学級・学年の人間関係の構築につながっている。さらに縦割りでの活動を仕組むことによって、チームへの所属感や学年を越えた連帯感を深めることができた。また、年度当初から3年生がリーダー学年としての自覚を持てるようになった。その結果、文化祭での合唱の取組においても、自発的な縦割りでの交流を図られ、3年生が後輩にアドバイスする場面が見られるようになった。



今後の展開『キーワード 定着と発展』

今年度始めた体育祭の縦割りの取組が継続的に発展していけるよう、次年度に向けた計画を検討していく必要がある。また、縦割りでの活動が定着していけるよう、文化祭だけでなく、本校で取り組んでいる無言清掃などの他の取組や、小中連携の取組にも取り組んでいきたい。

「文化祭縦割り交流会」



「無言清掃」



他校へのアドバイス『キーワード 長期的な見通し』

新たな取組が長期的に継続・発展していけるよう、行事の場面だけでなく、日々の活動にも取り組んでいけるように教員の意識をそろえ、見通しを持って取り組む必要があると感じる。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	福山市立新市中央中学校	校長氏名	門田 剛年	生徒指導主事氏名	油谷 大輔
-----	-------------	------	-------	----------	-------

取組事例名 『体育大会』

取組のねらい『キーワード：3つの心』

「感動・感謝・思いやりの心」を体感させる取組にすること。
生徒主導型の体育大会にすること。

取組の具体的内容『キーワード：努力 あいさつ 協力』

- ・努力を惜しまず、最後まで懸命に取り組む生徒
練習時間を提示（リーダー会で確認）し、その限られた中でリーダーが練習計画を立てて取り組む。
- ・競技・演技の前後に大きな声であいさつができる生徒
これからお互い（チームや相手）に頑張ろうという気持ちと、自分自身にやりきる気持ちを高揚させる。
- ・規律に基づいて競技・演技に参加し、協力して取り組む生徒
ルールを守り、正々堂々と競技させる。また、チームの作戦に合わせてやりきる。



取組の課題・創意工夫『キーワード：リーダー』

- ・リーダーの育成
3年生にとっては、前例のない（モデルがない）中での縦割りチームによる体育大会になった。しかし、3年生が引っ張らないとチームは動かないことや部活動の体験を生かすこと、得意分野を引き出すことなどを話しスタートをきった。
時間内で練習をやりきらなければならない事で、リーダーは練習方法や説明の仕方、並び方などを工夫し始める。また、入りにくい生徒への声かけを意識させた。
試行錯誤をしているところへ、教員の指導を入れながらリーダーを活躍させる。1・2年生のリーダーも実働させる。



取組の成果（効果）『キーワード：感動・感謝・思いやりの心』

- ・解団式
閉会式後、チーム毎に別れ解団式を行った。リーダーが思いを述べる時間にした。殆どのリーダーは、「力不足だったけど、ありがとうございました。」と言う言葉を述べていた。本心から出る言葉に、チームの誰もが感動・感謝・思いやりの心があふれ出す瞬間になる。また、保護者の参観もある中で、感謝の言葉も出てきた。
リーダーの感想には、「まとめることの難しさ」、「やり切ったという達成感」が語られていた。1・2生のリーダーは、「3年リーダーの素晴らしさ」、「先輩の役に立てなかった」、「自分たちの時には先輩を超えたい」などの思いが多かった。リーダー以外の感想では、「楽しい体育大会だった。」、「来年は後輩たちを引っ張っていきたい」などが多かった。



感想

赤組実行委員

色別の応援合戦の練習で、リーダー同士の意見が違ったり、後輩が指示を聴いてくれないなどの苦労もありました。でも、本番ではいままでの練習とは違ってすごくいいものが出来ました。これらの体験を生かしていきたいです。



青組団長

僕は去年の組体操リーダーみたいになりたいと思って、軽い気持ちで団長になりました。予想をはるかに超える大変さでした。どうしたら上手く言えるか、上手く指示を出せるかが大変で、正直やめようと思いました。

でも、短時間でダンスを多くの方が覚えてくれてとても嬉しくなりました。その時始めて、頑張っ
て教えてきてよかったなと思いました。

まだまだやることが多くあり、不安はぬぐいきれませんでした。リハーサルで上手く出来たとき、不安が吹っ飛びました。それからは、自信がつきみんなの行動も早くなりました。これも嬉しかったところですよ。

本番では優勝することが出来て、達成感と言うより、びっくりしすぎて気が抜けてしまいました。チームみんなのおかげです。ありがとう。

今後の展開『キーワード：新生徒会執行部』

・縦割りチームの活用

縦割りでの体育大会は、異学年の交流があり仲間意識が高まった。しかし、縦割りを活用することが出来ていない。新執行部員と来年度の縦割りの活用方法を考えていきたい。



他校へのアドバイス『キーワード：生徒の力』

・生徒の活躍

昨年度は、落ち着かない生徒の様子から、リーダーがなかなか思い通り動けなかった。今年度は、昨年度よりリーダーの数を増やした。それぞれの活躍の場が増えたことや3年生としての自覚が、リーダー性を発揮できた要因だと考える。



やりたい気持ちの強い生徒に任せるだけでは上手くいかないなので、必ず教師の指導を入れ活躍させることが大切だと考える。

今年度の3年生は、昨年落ち着きがなくて出来ないかもしれないと思っていたが、予想以上の出来にやりきってくれた。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	福山市立松永中学校	校長氏名	宇根 一成	生徒指導主事氏名	土橋 一美
-----	-----------	------	-------	----------	-------

取組事例名 『体育大会』

取組のねらい『キーワード：輝け、この瞬間』

・体育大会は集団での活動を通して、望ましい人間関係をつくり、自主的・自発的な活動を実践する態度を育てるなど、大きな教育的意義をもっている。その取組を通して集団への所属感を高めていくことをねらいとする。また、生徒も体育大会に掛ける意気込みは強く、その達成感やその瞬間はだれの記憶にも残り、感動を共有できるものとする。

取組の具体的内容『キーワード：リーダーシップ』

・学級の団結力を示す集団演技（行進）

一年生にとっては、5月に行われる体育大会は、入学してすぐの行事ということもあり、特に、学校に適應できるようにしていく必要がある時期である。学校への帰属意識や連帯感を高めるためにも、体育大会を通してこの学校に入ってよかったという気持ちを味あわせる感動的な体験としていきたい。そのため、学級の中での人間関係づくりの活動と関連付けながら、行進についての話し合い活動をしていく。生徒の中には、なぜ行進が必要なのか、楽しくないなどの消極的な意見が必ずでてくる。そこで、学級リーダーが3年生の行進を見学することで、その団結力と意気込みを感じ、その後の行進練習に対する姿勢が変わってくる。



その後、部活動対抗リレーをすることで、部活動の団結力は育まれる。

・縦割りでの練習

各色別チームの3年生からリーダーを置き、リーダーを中心に行進の練習計画、指導計画を立て進めていく。また、部活動の行進・リレーを取り入れ、キャプテンを中心とした練習計画を立て、後輩の指導に当たる。ユニフォームを着用し、部活の特色を出してもよい行進になるので、様々なパフォーマンスは、毎年工夫がみられる。この行進は保護者や地域の方々には好評で、日ごろの成果を発揮できる場となり、楽しみにされている。



その後、部活動対抗リレーをすることで、部活動の団結力は育まれる。

・3年生によるソーラン節

リーダー学年として引っ張ってきた体育大会の最大の山場である。自主的に練習を重ね、その結果の発表の場であり、下級生に対しても「リーダーとしてのありよう」を示すものになる。



・太鼓部による演舞

今年度太鼓部を設立し、演舞をした。この発表は、敬老会や学区文化祭等の地域活動にボランティア参加するきっかけをつくることができた。



取組の課題・創意工夫『キーワード：全員参加』

- ・一人ひとりが活躍できる場として、運動の苦手な子に対してテークオーバーゾーンをどのように活用していくのかということ、話し合い活動の中で解決させる。リレー種目だけでなく、学年種目でも全員参加のための話し合いにつながった。
- ・教職員も行進することで、生徒に先生も一丸になって体育大会に臨んでいるという姿勢を見せる。

取組の成果（効果）『キーワード：完全燃焼』

- ・自分の役割を自覚し、やりきることで一人ひとりが達成感を味わった。
- ・3年生のリーダーシップにより、よいムードのなか取り組めた。
- ・クラスで工夫して練習することによって競技は上達すると同時に団結力も高まり、競争心も生まれた。

今後の展開『キーワード：縦割り集団』

- ・次年度、各学年が同じクラス数なら縦割りにしていく方向で進める。
- ・全員で応援できる体制づくりを考える。
- ・事後指導として、中学校生活のリーダーシップとは何かを考えさせ、日常の場面や学習発表会の取組へと継続したものにする。

他校へのアドバイス『キーワード：共同体』

- ・教師、生徒が同じ思いで体育大会に取り組む姿勢が大切である。
- ・行事を通しての成長を学校生活へ生かす取組が必要である。
- ・リーダーの育成がポイントである。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	福山市立誠之中学校	校長氏名	海野 隆博	生徒指導主事氏名	友野 禎之
-----	-----------	------	-------	----------	-------

取組事例名 『体育大会 縦割りチームでの取組み』

取組のねらい『過程を大切にする自治集団の育成』

- ・望ましい集団活動を通して、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。
- ・生徒（学級・学年・生徒会・部活動）の自主的、創造的な活動を育てる。
- ・縦割り集団や学級での活動を通して、集団の団結を深め、過程を大切にする自治的集団を育てる。



取組の具体的内容『創る』

- ・縦割りの6チーム（赤・青・黄・緑・紫・オレンジ）の色別対抗とする。この縦割りは文化祭における全校合唱指導でも同じチームとなる。
- ・各チームに3年生からリーダー、副リーダーを置き、リーダーを中心に発表の内容や練習計画、実施中の指導やチーム課題の改善を行う。リーダーは、体育大会と文化祭の両方を兼ねても良い。また1年生、2年生から応援団としてクラス5～7人を選出し、1～3年生の応援団として指導をすすめる。
- ・中学生としての力強さ、素直さ、一生懸命さ、真剣さをアピールするもの考える。
- ・集団の美、力強さをアピールするものを考えていく。
- ・集団で練習し、上達できるものとする。
- ・誠之中学校に誇りの持てる応援合戦を行う。
（オリジナルの応援歌・応援型・リズムダンス等）
- ・『学級旗』を各クラスで作成する（学級委員会より提案）。
そのために、学級でデザインを考える。デザインが決定したら、体育大会の準備期間に学級旗担当生徒が練習と同時並行で取り組む。1年間、他の行事にも使用するため体育大会が終わったら、クラスへ掲示し、文化祭ではメイン会場である体育館へ全クラスの旗を掲示する。
- ・練習計画の概要は担当教員が準備するが、チームごとの細かい練習計画はリーダーを中心に各チームで計画させる。
- ・毎練習後、リーダー会を行い、本日の評価と課題の交流を行う。
その場を体育大会での規律徹底の基準になるよう指導する。
- ・各チーム（縦割りクラス）の担任や副担任は、自分のクラスを中心にしっかりと指導し、学年を越えての指導も行う。



取組の課題・創意工夫『 楽しみ、競う 』

- ・リーダーと応援団になる生徒は、クラスにおいても比較的中心になっているメンバーが多く、その流れについていけない生徒が出てきやすく、練習に参加したくない、練習のある日は欠席するなど、ネガティブな行動をとる生徒が毎年見られる。
- ・体育大会が5月の中旬ということもあり、一時的にモチベーションを上げて参加する生徒が少なくなく、「リーダーとしての意識」を継続させるための、継続的な取組が不十分であることが課題と思われる。
- ・反対に「リーダーになり、体育大会に関わりたい」という気持ちは1～2年生のころから芽生えており、成長過程における重要なモチベーションとなっている。
- ・リーダー会の中で、他チームの良い取組や課題を、全体にシェアすることで、工夫と改善を繰り返し成長する姿がみられる。
- ・本年度のスタイルになり3年が経過したが、他チームを非難するような言動は見られず、場面によっては、相互に応援したり、声を掛け合ったりする姿が見られる。



取組の成果（効果）『 生かす 』

体育大会の取組をとおして、1，2年生が「3年生のようになりたい!」「3年生に感謝」「来年も応援団に入る」など取組に対して肯定的な意見が多く、3年生もそれらの評価を聞いて、自己肯定感の高まりを感じることができる。（その後の学校行事、学校生活全般、部活動等）



今後の展開『 超える 』

より生徒の自主性を尊重した取組にしていくために、全ての学校生活に根ざした学校行事になるよう、リーダーシップや自己肯定感、有用感が育つ活動にしておく必要がある。同時に、最終的に成功体験となるように指導をすすめて行く。そのために厳しい指導、規律を守った生活、他者尊重の精神を日常的に指導していく。



他校へのアドバイス『 指導し、評価する 』

担当任せの取組になってしまう内容であるが、生徒指導面でのウェイトは高く、短期間に生徒の成長が大きく期待できる場面でもある。よって、職員全体で同じ基準で指導し、課題解決は迅速対応、成果に対してはしっかりと誉め評価することが大切である。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	呉市立阿賀中学校	校長氏名	矢野 秀樹	生徒指導主事氏名	平岩 弘文				
取組事例名 阿賀中学校ソーラン ～異学年交流を通じた伝統の継承～									
取組のねらい 『キーワード：伝統の継承』									
<p>○ 阿賀中学校区の小中一貫教育の取組として、「伝統の継承」をテーマに、様々な場面で異学年交流の場を設定する中で、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。</p> <p>ア 中学生は上級生の練習風景の見学から合同練習等を通して、阿賀中学校の伝統を継承していく心構えを学び、成長した自分の姿を意識させる。</p> <p>イ 1年生は上級生から学んだ事を生かして、中学生として成長した姿を小学校の児童や教職員に見せると共に、小学校6年生の指導を含め、阿賀中ソーランの演技と情熱、心構えを継承していく。</p>									
取組の具体的内容 『キーワード：先輩から学ぶ』									
<p>1 上級生の練習風景を見学 阿賀中学校の生徒としてソーラン演舞への情熱を体感させた。</p> <p>2 体育大会での演舞</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td>1 学年：基本演舞である「阿賀中ソーラン」</td> </tr> <tr> <td>2 年生：地元阿賀の伝説に創作を加えた「お漕ぎ船伝説」</td> </tr> <tr> <td>3 年生：阿賀中独自の演舞「YAMATO魂」</td> </tr> <tr> <td>総踊り：各学年の表彰後に実施（部活動終了前の15分間を使い、部活動の先輩が後輩の指導）</td> </tr> </table> <p>3 衣装について 阿賀漁協組合から寄贈された大漁旗や法被を全生徒が着用し踊っている。</p> <p>4 その後の発表</p> <p>ア 小学校の運動会での発表（中学校1年生有志が中学校の体育祭で発表した阿賀中ソーランの演技を発表）</p> <p>イ アガデミア*文化発表会で小学生と共に発表（中学校1年生が小学生に演技指導）</p> <p>ウ 中学校文化発表会及び地域公開での演技発表（小学校6年生が来校し見学）</p> <p>*「アガデミア」阿賀地区の7つの教育機関と地元自治会とで組織する「阿賀学園地域教育連携協議会」の愛称</p>						1 学年：基本演舞である「阿賀中ソーラン」	2 年生：地元阿賀の伝説に創作を加えた「お漕ぎ船伝説」	3 年生：阿賀中独自の演舞「YAMATO魂」	総踊り：各学年の表彰後に実施（部活動終了前の15分間を使い、部活動の先輩が後輩の指導）
1 学年：基本演舞である「阿賀中ソーラン」									
2 年生：地元阿賀の伝説に創作を加えた「お漕ぎ船伝説」									
3 年生：阿賀中独自の演舞「YAMATO魂」									
総踊り：各学年の表彰後に実施（部活動終了前の15分間を使い、部活動の先輩が後輩の指導）									
取組の課題・創意工夫 『キーワード：異学年との交流』									
<p>ア 演舞指導は伝統芸能部の生徒を中心とするが、ボランティアや希望者を募ることで多くの生徒が小学生の指導（演舞だけでなく、音楽係など）に関わることができるようにしている。</p> <p>イ いろいろな活動場面で異学年交流ができるように、場の設定について意識して計画を立てた。</p> <p>ウ 課題として、小学校との時間調整（授業終了から演技指導までの時間調整）や教職員の引率等の調整と共に、参加児童数と指導に参加する生徒の人数確保があげられる。</p>									
取組の成果（効果） 『キーワード：達成感』									
<p>ア 中学生は先輩として、切れのある演技を見せることで小学生に「自分もかっこよく踊れるようになりたい」という意識の高まりをもたせた。また、丁寧な演技指導により、あこがれの存在として慕われ、自己有用感が高まった。</p> <p>イ アガデミア文化発表会では地域の方も多く来られ、緊張感の中での発表となったが、実際の衣装や道具を使い演技することで、小学生も達成感を味わわせることができた。</p>									

ウ 見本となる上級生の活動を間近で感じることができ、自分たちの課題克服への意識が高まり、どの学年も一生懸命に発表することができた。

今後の展開『キーワード：先を見据えて』

ア 中学生は3学期後半に、来年度の体育祭発表に向けて、2年生の演技「お漕ぎ船伝説」、3年生の演技「YAMATO魂」の練習に取り組む。より伝統の継承者としての意識を持って取り組ませたい。

イ 新入生（現6年生）は、今回、アガデミア発表会に出演した児童を中心として、体育大会のクラス発表に向け、4月1日の入学受付（入学通知書を提出したり、入学式の心得や作法の練習等を行った）後、ソーラン講習会の案内をし、入学式までの短い時間ではあるが、ソーラン練習の核となる生徒を育成し、学年始めのクラスづくりに結びつけている。

他校へのアドバイス『キーワード：施設の活用』

ア 本校は小学校と隣接しているため、「伝統の継承」というキーワードの核となるソーランだけでなく、行事の中で、比較的小中の交流の場を設定しやすい。

イ 年度当初の学級集団づくりとして生かすことができる。

ウ 各学年3クラスという規模であれば、体育館などの施設をより有効に活用できると思います。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	廿日市市立野坂中学校	校長氏名	植松 寛雄	生徒指導主事氏名	川本 宏
-----	------------	------	-------	----------	------

取組事例名 『縦割り集団を生かした体育大会の取組』

取組のねらい 『自己有用感を育む異年齢集団の関わり』

縦割り集団を生かした自発的な活動を仕組み、生徒間の交流・理解を深め、互いに認め合う集団づくりを推進する。

取組の具体的内容 『応援リーダーを中心とした生徒の自主的な活動』



○縦割り集団結団式の運営と、結団式での集団としての意識付け



○応援合戦での縦割り集団としての結束力

取組の課題・創意工夫 『達成感の味わえる縦割り種目』

○縦割り集団で力を合わせて…

○3年生がリーダーで、組み集団を引っ張る



取組の成果（効果）『リーダーの自己有用感』



○感動的な解団式 ※特に応援団長（3年生）の自己有用感の高まり

今後の展開『その他の行事・日常生活へ』

○今後、その他の行事で、リーダーを中心とした更なる自己有用感を高めるための取組

○日常生活でも、リーダーを中心とした自発的・自治的活動を…

他校へのアドバイス『自己有用感を育てることは…』



○掲示物での肯定的評価
メッセージボードの活用

○データ（アセス、学校評価アンケート）
に基づいた、自己有用感の向上



平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	廿日市市立廿日市中学校	校長氏名	沼本 慎二	生徒指導主事氏名	吉岡 知美
-----	-------------	------	-------	----------	-------

取組事例名 『リーダー指導を軸にした体育祭と文化祭に向けた取組』

取組のねらい『キーワード リーダー性の伸長』

本年度本校は耐震工事の関係で体育祭と文化祭の両方が2学期に実施となった。9月の体育祭から10月末の文化祭といった短い期間での開催となったが、反対にこの条件を生かすことを考え、体育祭でリーダーとしての動きを理解させ、文化祭で自主的に考え行動していく力をつけることをねらいとした。

取組の具体的内容『キーワード リーダーシップとフォロアーシップ』

今年度は体育祭で、昨年度まで全学年縦割り練習をしてきたソーランをあえてクラスでの取組に変更し、各クラスのリーダーの動きを前面に押し出させる方向で指導に入った。従って前年度まで組集団の演技であったものを各クラスでの発表という形に変更した。

まずは各クラスで4～5名のソーランリーダーを立候補で選出し、夏休み中に5クラス全体のリーダー会を実施し、全体リーダー会でリーダー長を選出した後、学年練習・クラス練習・リーダー練習・全校練習といった形で計画的に取り組みさせた。学年やクラスで講師を迎えて、基本の踊り方の指導を受け、一人ひとりがしっかり踊りの形を覚えきるまで何回も練習を繰り返させた。各クラスのリーダーは事前にリーダーだけのソーラン練習会を持つことで、全体の前で踊れる力量を身につけ、クラスの一人ひとりがきちんと踊れるように助言し指導する立場でクラス練習にのぞませた。

基本の形を学年やクラス練習で覚えたのち各クラスで考えた隊形練習に入り完成後、学年内での交流・全校での交流をする流れで練習させ、体育祭での演技発表につなげていった。

この取組で、リーダーとしての動きを学び、次の文化祭の合唱コンクールでのパートリーダーを体育祭のときより高い位置づけのリーダーとしての意識と動きを持ってのぞませた。ソーラン指導でリーダー的な役割をした生徒がさらに向上心を持ち、合唱のパートリーダーになることもあったが、リーダー的な動きをした生徒たちをフォローする力を高めるような場の設定を仕組むことで生徒の主体性を育てる動きを作ることができた。



取組の課題・創意工夫『キーワード ねうちづけし、効果的に伝える 』

取組の過程では、取組内容に一生懸命にがんばりきる生徒もいれば、あまり参加する意欲が無く、リーダーの指示に従わず文句を言ったりする生徒も出てくる。リーダーとして、どのような言い方で声かけをしたり、全体や個に対する評価をしていくべきなのかを教師側が指導したり気づかせたりすることが課題となってくる。思ったように周囲の生徒が動いてくれない時が生徒の成長の大きなチャンスだと捉え、彼らを支えていくことは当然として、リーダーとして周囲の生徒に訴えたいことや伝えたいことをどのように表現させたらよいかを考えさせることが重要となる。(リーダー研修会の実施) 以上のような活動で得たことを基にして、効果的な練習途中の言葉かけや、終了後の評価などで全体の士気を高めたり、細かい点を観察させ、成長が見られる部分を評価し、生徒自身の言葉で全体に伝えさせる場を確保しながら、教師による小さな成長を見逃さない評価を、リーダー・全体生徒に対して行っていくことが大切である。

取組の成果(効果)『キーワード 共感とわかちあい 』

ソーラン・合唱コンクールの取組の過程で、リーダーが頑張るという意識以上に、リーダーの中から「クラスのみんなで一緒にがんばりたい」といった言葉が出てくるようになった。リーダー同士もクラスを超えていい意味での刺激になったことはもちろん、しんどい部分を分かち合えたり、リーダーとしてどのように行動すべきか、お互いの良き相談相手になった。体育祭で学んだことが、次の文化祭での合唱コンクールへの取組意欲の喚起にもつながり、前のリーダーが現リーダーを支える雰囲気が生まれたり、平素の掃除や当番活動においても協力し合っていこうとする姿が増えていった。

今後の展開『キーワード 日々の生活の中に拡げる 』

今回の取組は、クラス集団をベースとして、人前に立ってリーダー性を発揮するための場をできるだけ多くの生徒に提供することをねらいとして取り組んだが、今後は生徒会メンバーを中心に学年のリーダーとして取組むだけでなく、来年度の廿日市中学校を担っていくため全校生徒を巻き込んだ取組を企画運営していく力をつけさせなければならない。あいさつをもっと活発にさせることと無言そうじの完全実施に向けて、具体的な取組を展開していきたい。

他校へのアドバイス『キーワード 子どもたちをしっかりと見つめ、いっしょに動く 』

我々は、日々、問題行動を繰り返す生徒指導に追われ、前向きにさまざまな取組に尽力してくれる生徒たちと高い目標に向かってじっくり取り組むことが困難となる状況があるかと思います。本校も以上のような状況ではありますが、苦しいときこそ、教員がベクトルをそろえて前進していくことはもちろん、生徒の力を信じて高い目標に向かって一緒に進んでいきたいものです。

生徒は教師が関わる以上に、他の生徒からの真剣な関わりがあれば、更により良い方向へ変容していくはずで、課題を抱えた生徒たちも周囲の生徒たちから認められることによって、自己有用感を高め、自分の本来進むべき道に向かっていけると考えます。我々はまず生徒同士が一生懸命に活動し、そして語り合える場を提供し、教員はその活動をよく観察し支援しながら、生徒一人ひとりの行動や活動を価値化し伝えていかなければと思っています。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	尾道市立栗原中学校	校長氏名	宮里 浩寧	生徒指導主事氏名	川井 和郎
-----	-----------	------	-------	----------	-------

取組事例名 『行事における主体的な取組の場の設定』**取組のねらい『キーワード 主体的な取組』**

生徒が主体的に取り組む場を設定することにより、3年生のリーダーシップを育て、自己肯定感を高めるとともに、栗原中学校の新たな伝統を創造する。

取組の具体的内容『キーワード 3年生のリーダーシップ』

- ・ 体育大会の縦割りチームの取組において、それぞれのチームのアピールの時間（応援合戦）を設定した。内容については各チームの3年生が中心となって考え、1・2年生に指導した。
- ・ 文化祭において、3年生が自分のクラスのアピールをする時間を新たに設定した。
- ・ オリジナルマスコットキャラクターを作成した。

取組の課題・創意工夫『キーワード 条件の設定（教員の指導）』

課題

- ・ 取組に向けての時間の確保

創意工夫

- ・ 体育大会の応援合戦の取組においては、各チームのリーダーが集合する時間を毎日設定し、担当教員とともに進捗状況を確認し合い、時間・練習・内容についての条件を統一した。
- ・ 文化祭のアピールタイムについては、あらかじめ時間や内容についての条件を設定し、その中で各学級の担任・生徒が考え、取組を進めた。

取組の成果（効果）『キーワード 達成感』

- ・ 体育大会の応援合戦の取組を通して、3年生が1・2年生を引っ張っていかこうとする姿が見られた。また、体育大会後の1・2年生の感想には、3年生への感謝の言葉、賞賛の言葉、自分たちが3年生になった時の見通しが書かれていた。



- ・ 文化祭でのアピールタイムでは各学級の創意工夫が見られた。これまでの学級の取組を振り返ったり、担任・クラスメート・保護者などへの感謝の気持ちを表したり、それぞれの学級のカラーを活かして表現していた。また、それらの発表を1・2年生が真剣に見ていた。



今後の展開『キーワード 生徒会のさらなる活性化』

- ・今年度の体育大会と文化祭の取組のきっかけは、生徒会執行部の強い要望であった。これらの取組を通して、生徒会執行部をはじめとする3年生はリーダーとして大きな達成感を得ることができた。これらの取組を見てきた新生徒会執行部では、行事だけでなく、日頃の生活の場面においても、主体的な取組の場を設定していく。

他校へのアドバイス『キーワード 教職員の関わり』

- ・生徒の好きなようにさせるのではなく、条件を設定して、その中で考えさせることにより、生徒自身の創意工夫が生まれると考える。
- ・生徒任せにして、教員はノータッチではなく、側面的支援（見守り、アドバイス）をし、ともに頭を悩ますことにより、信頼関係が生まれると考える。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	府中市立府中中学校	校長氏名	池田 哲哉	生徒指導主事氏名	伊藤 弘
-----	-----------	------	-------	----------	------

取組事例名 『第1回 府中中学校運動会』

取組のねらい『キーワード 活躍の場で、自信と誇り』

- ・生徒に活躍の場を持たせ、達成に向けて取組ませることで、やればできるという自信をつけさせる。
- ・生徒・教師・保護者が協力して取組むことで、学校への所属感や一体感を持たせる。

取組の具体的内容『キーワード 中学生らしさ』

- ・今までのふれあい重視の小中合同運動会から、中学生らしい力強さ、規律、主体性等を重視した中学校単独の運動会に変更した。

取組の課題・創意工夫『キーワード 生徒たちが考える』

生徒実態

- ・指示待ちが多く、生徒が主体的に動くことができていない。(今まで教師主導の取組が多かった)
- ・生徒に自信がなく、正しいとわかっているにもかかわらず周囲に流される。
- ・特定の生徒の自分勝手な行動があり、問題行動をくり返す。(3年生が2年生時に)

生徒の活動

- ・3年生の応援リーダーを中心に、練習を企画、運営していく。(応援練習、行進練習等)
- ・縦割り練習では、3年生を中心に練習を行う。
- ・学年種目では、練習する際に、クラス内のかかわりや協力を必要とする種目を設定する。
(30人31脚、全員リレー、大縄とび)
- ・係は部活ごとに分担し、キャプテンを中心に担当を考え、責任を持って取り組ませる。
- ・課題のある生徒にも役割を与え、支援をしながら取り組ませる。(応援リーダー、係の仕事など)



応援リーダーの練習



全員参加の応援合戦



練習後の応援リーダーの話

取組の成果(効果)『キーワード 次につながる』

①生徒の達成感、学校としての一体感を実感

特に3年生は、「自分たちの代から始まった」という誇りを持つことができ、その後の活動でもリーダーシップを持って取組む姿勢を見ることができた。(部活動、文化祭など)

- ・最後のリレーの応援では、今まで出たことがない大きな声で応援している自分がいた。
周りの子も同じように声を出していた。府中中が1つになっていた。(3年)
- ・応援のあとみんなで泣いて、本気でやってきてよかったと思った。(3年応援リーダー感想)
- ・リーダーの人たちは「ついてきてくれてありがとう」と言ってくれたけど、リーダーの人が本気になって教えてくれたから、自分も本気になる事ができた。だからリーダーの人への感謝の気持ちでいっぱいです。(3年)

<文化祭後の3年の感想>

- ・最高の発表ができた。後輩たちには自分たちを超えるよいものをつくってほしい。

② 1・2年生の3年生への憧れと、次年度への意欲

- ・僕たちが楽しめたのは、休憩時間を減らして一生懸命やってくれた先輩方のおかげです。
来年は自分たちが今年よりいい運動会にしたいです。（2年生徒）

③ 取組を通して形成された生徒と教師の良い人間関係

④ 生徒のがんばりの地域・保護者への発信で、学校への理解・協力体制が確立

- ・府中学園最高！！生徒全員から、盛り上げていこうという気持ちが伝わってきたので感動した。（保護者感想）

※年度初めに①～④のことができたので、その後の様々な取組がしやすくなった。

今 後 の 展 開『キーワード 生徒が考える』

① 生徒が考え、生徒が作り上げる場面をさらに充実させる。

- ・応援合戦の中身の充実（コピーからオリジナルへ）
- ・生徒が種目を考える。

② 小中連携

- ・小学生の参加，見学
- ・小学校の運動会への中学生の参加

他校へのアドバイス『キーワード 生徒にまかせてみる』

- ・生徒に役割を持たせ、その頑張りを評価することの積み重ねで、生徒は主体的に動き、教師の予測を大きく上回る結果をあげることができた。
教師が指導したい気持ちを抑えて、生徒にまかせ、生徒の活動をしっかりと支援する体制づくりが必要である。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島県立沼南高等学校	校長氏名	山垣内 俊行	生徒指導主事氏名	櫻田 隆紀
-----	------------	------	--------	----------	-------

取組事例名 『平成 27 年度 沼南祭・体育祭』

取組のねらい『キーワード 自己肯定感の醸成・挨拶の徹底』

「沼南生」としての自覚を持ち、集団の中でのルールを守り、規律ある集団行動や他者を尊重する態度を育てる。さわやかに挨拶できる沼南高校生となる。

取組の具体的内容『キーワード 自己存在感を確認する』

「とり戻せ！！プライド」

6月の沼南祭（文化祭）では、家政科は、3年間の集大成としてファッションショーを実施した。ファッションショーは家政科の下級生が憧れる。そうして、目標とプライドが引き継がれていく。園芸デザイン科3年生は4つの研究班がそれぞれステージ発表を行った。普通科は、1年生が「桃太郎」の劇を英語で発表した。普通科3年生がとても羨ましく見ていた。小・中学校の時に経験させてもらえなかった事にチャレンジさせ、鍛え、達成感を味あわせ、力と自信をつけさせる指導を行った。



10月の体育祭は、昨年までは、生徒会行事であったものを、今年度から学校行事として位置づけ、教職員ともども学校全体で取り組んできた。生徒の日々の成長した姿、そして一生懸命がんばる姿を、保護者や地域の皆さんの是非見ていただきたいという思いで取り組んできた。そうした取り組みのなか、生徒は各競技で一生懸命体を動かし、持てる力を十分に発揮した。入場行進やソーラン節は、昨年度からの行事であるが、今年はさらに進化して充実したものになった。これから本校の体育祭の伝統となっていくものと確信している。



取組の課題・創意工夫『キーワード 声を出して自己アピールする，他者を承認する』

最初に「集合・整列」「行進」「挨拶」で声を出す。
各集会や授業の始まりで，心を一つにした挨拶を行っていく。

取組の成果（効果）『キーワード 自己の所属の確認と他者の承認』

体育祭で印象に残る場面があった。午前の競技が終わり，全校生徒がグラウンドに整列し，諸注意を聞いた後，全体での最後の号令があった。今年から，授業の開始と終わり，そして全校集会等で，「1，2，3，4，5」のタイミングで深く挨拶を行うことを徹底してきた。この場面でも，生徒は，いつものように号令の合図で，深々と整った挨拶を行うことができた。そのとき，保護者席から自然発生的に大きな拍手がわき上がった。保護者や地域の方々から，生徒のみならず教職員も大きな達成感をいただくことができた。



今後の展開『キーワード 学習規律（授業の号令）の定着』

授業での号令を各学年で取り組み，全学年で徹底していく。
授業はもちろん，教育活動のあらゆる場面でしっかりした号令・挨拶をさらに定着させていく。

他校へのアドバイス『キーワード 自己達成感，成功体験の積み重ね』

生徒自らが表現する場を意図的につくっていくことで成功体験を積み重ね，自己肯定感を高めていく。
これは「学びの変革」の取組が目指すところと同じである。
ただ，個人ではなく，学校組織としてこれらの取組を進めていくためには，教職員が一つのチームとならなければその効果が望めない。生徒指導主事のリーダーシップのもと教職員間でしっかり議論して，指導に関するフロントをそろえていくことが大切である。

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島県立府中東高等学校	校長氏名	八幡 茂見	生徒指導主事氏名	曾我 和宏
-----	-------------	------	-------	----------	-------

取組事例名 『体育大会の実施』

取組のねらい『キーワード 生徒の自己肯定感・帰属意識を育てる』

本校の生徒の中には、学校に対する帰属意識や自己肯定感が乏しく、充実した学校生活を送れない生徒がいる。そのため体育大会の実施を通して「府中東高校の生徒でよかった」と言える生徒や「やればできる」という感情を持った生徒を育てていきたい。

取組の具体的内容『キーワード 計画的に生徒に活躍の場を与える』

- 全校集会を計画的に行い、「府中東の再生の第一歩」という体育大会の意義を、生徒に繰り返し訴えた。
- 実施種目をアンケートで選択させ、生徒の意見を取り入れて決定した。
- 集団行動に参加する生徒を募り、意欲のある生徒に活躍の場を与えた。
- 生徒会執行部の生徒には準備係を、都市システム科の生徒には測量技術を利用したトラックの作成を、インテリア科の生徒には入退場門や得点掲示板の作成を、そして運動部の生徒には審判や招集係を依頼するなど、多くの生徒に活躍の場を与えた。
- 学年対抗、クラス対抗の種目をつくり、各応援団を募集した。
- 個人の運動能力で勝敗のつく徒競走などの種目よりも、大縄跳びやムカデ競争など、集団での種目や、リレーなどを多く取り入れた。
- 体育の授業の中で、繰り返し指導を行い、予行演習は二日に分けて実施した。



取組の課題・創意工夫『キーワード 意欲を高める』

- 集団行動の生徒の頑張りに目を向けさせ、「頑張っている姿が美しい」と生徒に思わせる。
- 「クラス鉢巻を作りたい」とか「クラス旗を作りたい」という生徒から出てきた積極的な意見は、どんどん取り入れ、やる気を引き出させた。



取組の成果（効果）『キーワード 感動した体育大会』

○ 集団行動が行われている時、全生徒が、教員からの指示を受けることなく自発的にクラスメントに入り、真剣に見入り、自然に拍手が生まれていた。

○ 普段見ることのできない生徒の頑張る姿や、明るく元気な姿、爽やかな笑顔を見ることができた。

○ 実施後の生徒アンケートでは、約 85%の生徒が「感動した」と答え、94%の生徒が「体育大会を実施してよかった」と答え、充実してよかったと評価している。また、「来年以降も実施したい」とか「新たな種目を考え、取り入れていきたい」という積極的な意見が多く出た。



今後の展開『キーワード つなげていくこと』

本校の生徒は、行事に対して盛り上げて楽しいものにしていくという意識を持っている生徒は多いが、行事の盛り上がりや、翌日以降の学校生活につなげたり、自己肯定感を持ち続けたりすることにつなげられない生徒がいる。何もないところから始めた本校の第一回体育大会の成功体験を、生徒だけでなく教職員も肯定的にとらえながら次の一歩につなげていくことが大切である。

他校へのアドバイス『キーワード 生徒の力を持つ力を信じる』

2年前の生徒会執行部から「体育大会を実施したい」という声は上がっていた。しかし本校の生徒状況から当面はその声を受け入れることができないと考える教職員が多かった。今年度も不安はあったが、実際に行ってみればほとんどは杞憂であった。生徒を信じて行事を計画的に行えば、生徒は持っている力と可能性を発揮してくれることを改めて認識した。生徒とともに教職員集団が組織として行事を創りあげれば、必ず生徒の輝く姿が見られると思う。